

長久保赤水の資料、市に寄贈

高萩 顕彰会「文化財目指したい」

江戸時代中期の天文・地理学者で、高萩市出身の長久保赤水（1717～1801）。その功績の伝承活動をしている顕彰会（佐川春久会長）が、同市に地図製作の際の資料など、関係資料229点を寄贈した。

赤水は、伊能忠敬の地図ができる42年前の1779年、経線と緯線を日本で初めて記した地図を完成させた。7月に都内で開催される国際地図学会議に参加した研究者が、視察、研修のため、市歴史民俗資料館の「長久保赤水資料群」を訪れる予定だという。

寄贈式は先月25日であり、佐川会長が「偉業を広く知らしめるため、資料を一本化して市の保有とし、

維持、管理をしてもらいながら国の（文化財）指定を目指したい」とあいさつ。

大部勝規市長は「業績を文化財にするためには、なぜこの地図が素晴らしいのかを世界に発信していかねばならない」と話した。



大部市長（中央）に關係資料の目録を手渡した長久保赤水顕彰会のメンバー＝高萩市役所